

地理資料シリーズ

里山としての谷津の自然

茨城県岩井市付近

【写真解説】 関東平野の台地や丘陵の端には「谷津」と呼ばれる樹枝状谷がみられる。航空写真で見ると、まるで樹木が枝を広げているような、いくつもの入り組んだ谷があるのがわかる。緑が色濃い部分は台地面や谷壁にある森林で、谷の部分は茶色や薄い緑色で、多くは水田である。台地上で緑が縞模様に見える場所はゴルフ場である。台地の端から湧き出た何本もの小さな流れは「谷津田」を潤して、菅生沼のある中央部の大きな谷に注ぎ込んでいる。地上写真はこの小さな谷津の谷頭を撮影したもので（空中写真の赤丸）、谷壁には水源涵養の木々が茂り、緩やかな傾斜の谷には畦で囲まれた小さな谷津田が見られる。言うまでもなく谷津田や雑木林は、人とのかかわり合いが深い二次的自然で、典型的な「里山」の自然である。

(写真 犬井正/国土地理院)

台地や丘陵が8割を占める関東平野には、谷津（やつ）が多くみられる。場所によっては谷戸（やと）あるいは、谷地（やち）とも呼ばれており、台地や丘陵地に、細かく入り組んだ樹枝状谷のことである。縄文晩期から弥生時代にかけてのおよそ2000～3000年前に、海が退き入江は陸地になって、谷津の姿がこの頃からみられるようになった。まさにその時期に、日本に水稻と水田稲作がもたらされた。

谷津の最奥地の木々に囲まれた谷頭には泉の湧き出し口があり、これを水源として谷の中に「谷津田」が開田された。水の乏しい台地には、クヌギやコナラやアカマツからなる森林と畑が広がり、谷の斜面は水源涵養の役目を果たすクヌギやコナラの林になっている。落ち葉が分解してできたミネラル分が豊かな土壌をくぐってきた灌漑水によって、谷津田では良質米が収穫できる。谷津田の近くには林や採草地や農道や畦があり、堆肥用の落ち葉、緑肥用や牛馬の餌料用の生草や、屋根葺き材料のカヤ、山菜や薬草などが採取できた。

採取した落ち葉で堆肥を作り、耕土を豊かにし、落ち葉を入れた苗床で作物の苗を育て、農業の再生産を維持してきた。また、15～20年の周期で、クヌギやコナラを伐採して萌芽更新を行い、燃料用の薪や炭も得てきた。このように様々な環境で構成されている谷津の自然は、人とのかかわり合いの強い二次的自然の「里山」である。里山は、人々の生活の場そのものであると同時に、ウサギやタヌキやキツネをはじめとした野生動物にも、それぞれに適した生息環境を提供してきた。里山では自然と共生し、省資源的で循環的な生活様式が築かれてきた。

しかし、1950年代中頃から始まる高度経済成長期以降になると、「燃料革命」や化学肥料の普及が進み、里山と農業生産や農村生活との関係が希薄になってしまった。私たちは里山に背を向け、化石燃料の石油に

依存しながら、大量生産・大量消費・大量廃棄のライフスタイルを是としてきた。農業従事者の高齢化と後継者難のために、不便で生産性の上まらない谷津田の農耕を放棄するケースが増えてきた。耕作放棄された湿田の谷津田には、アシ、ガマ、クズなどが進入し、急速に遷移が進行している。里山にはもはや見るべき、用いるべき資源がないかのように放置されたり、ゴミ捨て場代わりにされたり、住宅や工場や廃棄物処理場、ゴルフ場などの都市的土地利用に転用されてきた。

しかし、私たちは自らの物質的・経済的な繁栄だけではなく、里山を永続的に大切に使い、動植物と共に生きられる豊かな空間として、次世代に引き継いでいきたいと願っていることも確かである。それには見捨てられてきた里山の森林や田畑を活用し、人々が里山に集い、遊び、学び、働けるようになる様々な新たな取り組みが必要である。農民だけでなく、行政、企業、市民、NPOなどが様々なパートナーシップを組んで、現代の里山利用ともいうべき、何らかの社会的・経済的システムを確立する必要がある。

岩井市の「茨城県自然博物館」、土浦市の「穴塚の自然と歴史の会」、関城町「里山を守る会」などでは、谷津を中心とした里山の調査研究や保全活動を行っている。安全な有機農産物生産に不可欠な堆肥用の落ち葉を採取するに止まらず、木屑を固めた燃料用ペレットの普及や、電気と熱を併給できる木質発電の実施、薪窯で焼いたピザやパンのレストラン、木炭・竹炭の新たな用途の開発、ビオトープづくりと環境教育、エコツーリズムなどが、今、日本各地の里山で始まっている。農村空間としてだけでなく生物の多様性の保持、保健・健康林としての機能も複合的に有している里山を健全な環境として次世代に引き継いでいくことが、私たちに課せられた社会的義務でもある。

(獨協大学経済学部教授 犬井 正)